いつものサイピアじゃない…！
～淡水研といっしょに科学館を水族館に早変わり～

岡山県生涯学習センター　人と科学の未来館サイピア　学芸員　岡　成美

1．はじめに

平成 23 年に幕を下ろした岡山県立児童会館からリニューアルオープンして 10 周年を迎えた当館は、「サイピア」と呼ばれ、プラネタリウムのある科学館として認知されつつある。同じく節目の年、発足 50 周年となるのが、知る人ぞ知る、知らない人は知らない「岡山淡水魚研究会」だ。私自身、その名前を知ったのは、丸 30 年を迎えた年。生まれたときから岡山で、いまだにその土地に住み続けているのに、知らなかった。岡山が淡水魚の宝庫だったなんて。

岡山の天然記念物「アユモドキ」をはじめとする岡山の豊かな淡水魚の保護活動を行う岡山淡水魚研究会主催で開催した企画展「おかやまアユモドキ水族館」とその後について紹介する。

2．岡山淡水魚研究会５０周年企画「おかやまアユモドキ水族館」の開催

1）概要

・会　　期　　令和５年９月９日～９月 24 日
・会　　場　　サイピア２階企画展示室
・来場者数　　1,899 人
・内　　容　　岡山県内に生息する淡水魚の生体展示
・主　　催　　岡山淡水魚研究会

ポスター　秋 ver

2）生体展示

・淡水魚４９種

フナ sp.、コイ、コウライニゴイ、ヒブナ、金魚、オイカワ、ヌマムツ、カワムツ、ムギツク、モツゴ、ミナミメダカ、メダカ (色つきメダカ)、ニホンウナギ、カマツカ、ナガレカマツカ、ツチフキ、カネヒラ、シ

ロヒレタビラ、タイリクバラタナゴ、ヤリタナゴ、アブラボテ、カワバタモロコ、タモロコ、コウライモロコ、イトモロコ、オヤニラミ、アユモドキ、ドジョウ、サンヨウコガタスジシマドジョウ、チュウガタスジシマドジョウ、オオシマドジョウ、ナガレホトケドジョウ、ナマズ、ギギ、アカザ、ウキゴリ、スミウキゴリ、カワアナゴ、ヨシノボリ sp.、ドンコ、ゴクラクハゼ、ヌマチチブ、チチブ、カジカ、ウロハゼ、カダヤシ、オオクチバス、ブルーギル、カムルチー

・淡水生物１１種

イシガメ、クサガメ、ニホンスッポン、ミシシッピニオイガメ、アカハライモリ、ヌマガエル、アメリカザリガニ、スジエビ、カワリヌマエビ、テナガエビ、モクズガニ

婚姻色のでたカネヒラ（オス）

ナマズのあくび？

野生で確認は県内２例目の外来生物

３）その他の展示物と協力団体

・岡山県自然保護センター

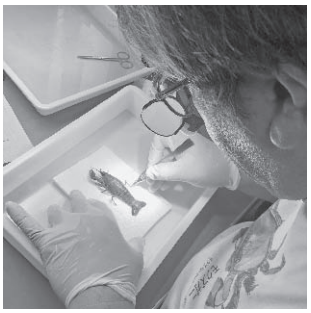
本物の石に水生昆虫やカニ等の写真をはりつけたり、砂の中に写真を隠したりして、川の中の石をめくると生物がいるということ、上流、中流、下流域にどんな生物がいるのかということを知ってもらう「石はぐり体験コーナー」を作ってもらった。

石はぐり体験

・岡山理科大学理学部動物学科

ウンキュウ（イシガメとクサガメの交雑種）とミシシッピアカミミガメのはく製、アユモドキの液浸標本をお借りし、ミシシッピニオイガメの同定をお願いした。

当館学芸員が用水路で発見した青いアメリカザリガニを生体展示する予定だったが、会期を迎える前に永眠したため、青色を残したままはく製にしてもらい、展示をした。



青色を残したままはく製に

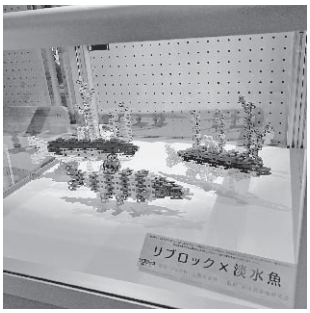
・株式会社ロマラン洋菓子店

店長が淡水魚好きで、その保護の一助にと、天然記念物アユモドキをイメージして作ったパイ「あゆもくん」を展示、販売した。

あゆもくん

・株式会社ベネッセコーポレーション

「しまじろうのわお！」内で放送された「あゆもどきのうた」を展示室内で常時、動画付きで流した。岡山淡水魚研究会のつながりで、しまじろうからウェルカムメッセージをいただき、展示室前で流した。



リブロックで淡水魚

・ブックローン株式会社

「リブロック」というブロック玩具で、「アユモドキ」と「オイカワ」と「ムギツク」を制作してもらい、リブロック作品や展示物をよく観察すれば解けるクイズを展示室内に設置。正解者には、リブロックのプレゼントをした。

・ジオラマ工房

川の上流から下流にいたるまでの淡水魚の生息場所の違いを感じてもらうため、淡水生物のフィギュア展示を行った。フィギュアを展示する土台となる川のジオラマを岡山県のジオラマ愛好家によって結成されたジオラマ工房監修のもと、制作した。

フィギュアが生き生き

4）展示のポイント

・照明

水族館のような空間を創り上げるために、照明に力を入れた。全面ガラス張りの展示室内の窓に段ボールや防草シートを貼って遮光し、暗室をつくった。照明は、水槽に取り付けたLEDライトや黄みがかった電球色のスポットライト、筒やセロファンを取り付けて散光を抑えたスポットライトのみにし、薄暗さを保った。

下から見ると川の中の生物のシルエット

・水槽

30cm水槽13個、45cm水槽1個、60cm水槽6個、90cm水槽2個、120cm水槽2個、カメ用のトロ箱3個を使用し、できるだけ種を分けた。

・飼育

アユモドキは、岡山県の人工繁殖事業と連携し、人工繁殖によって生まれた個体を展示。また、アユモドキの移送は展示会場まで他の場所を経由することなく、担当者同士が直接顔を合わせられる日時で行い、会場に到着してから戻すまでが１か月以内に収まるように会期を設定した。

天然記念物アユモドキ

他の淡水魚も、種によってエサを変え、岡山淡水魚研究会とサイピアの職員でローテーションを組み、水槽の様子を常にチェックできる体制にした。苦戦したのが、ドジョウだ。水温など心配していたナガレホトケドジョウは、最初から水槽を別にし、展示終了までそれほど数を減らすことはなかったが、ドジョウとサンヨウコガタスジシマドジョウ、チュウガタスジシマドジョウ、オオシマドジョウを一緒に入れた水槽は、ほぼ全滅状態になることが続いた。そこで、ドジョウとそれ以外の二つに水槽を分けて展示し、薬浴もさせた。

・キャプション

絵本作家たかはしまいまい氏にお願いし、生物のイラストに簡単な一言解説文をつけたキャプションをつくってもらった。この時描いてもらったイラストは、サイピアオリジナルデザインの缶バッジにし、キャプションの紙と一緒にガチャガチャに入れて販売した。

親しみやすいイラスト

・ギャラリートーク

岡山淡水魚研究会の方々が平日は１名、土日祝日は２～３名が常駐し、50 周年記念で作られたオリジナルアユモドキＴシャツを着て、来場者に体験コーナーの説明や淡水魚の熱いトークまで、楽しさが２倍、３倍になるような解説をしてくださった。アユモドキＴシャツは現在も当館のミュージアムショップで販売中。

専門家の話はおもしろい

３．科学館が水族館になった、その後

１）生き物をテーマにした連続講座

今年度から「いきもん＠生き物を知る連続講座」として、生き物をテーマに、体験重視の講座を開講した。第一回は、「ほしぞらタイム　いきものだらけ SP」として、プラネタリウムの中で生き物の星座だけに注目し、岡山県自然保護センターの学芸員が、「おおぐま座のしっぽが長い理由は、昔、ホラアナグマというしっぽの長い熊がいて…」のように、生き物

第三回チラシ

の生態の観点から星座絵や神話を紐解き、当館の解説員との掛け合いで星空解説を行った。第二回は、今回の企画展と連動して行った「絵本作家まいまいさんと淡水魚をかく＆水族館ツアー」。第三回は、企画展後に行った「ちょっとそこの水路でガサガサしよう」。第四回は国立研究開発法人海洋研究開発機構高知コア研究所の方を講師にお招きした「生物がすむ果てはどこだ？ - 海底よりさらに下の地底世界を探る -」。第五回は防府市青少年科学館ソラールの学芸員の方に講師を務めていただき、昆虫の構造色に注目した「ムシたちのキラキラのヒミツ～キラキラボトルを作ろう～」。

当館では、生き物関連のイベントが少ないのに加え、特に今年度は大々的に生体展示をするということもあり、挑戦をしたかった。生き物と一言にいっても、ほ乳類、魚類、鳥類、昆虫、植物…とさまざまな観点から深掘りできる。年間講座ではなく、あえて「連続」講座としているため、今年度が終わっても講師を務めてくださる方を発掘し続け、継続していきたい。次回は、「妖怪」の予定。

2）常設の水槽展示

連続講座の第三回で、岡山淡水魚研究会の方に講師をしていただき、当館近くの用水路に胴長を着て入り、参加者と魚とりを行った。とった淡水魚やエビ、貝は、当館で飼育展示をしている。大人 17 名、子ども 18 名の参加だったが、用水路に入らなかった大人の参加者からは「入ればよかった」という声が多く、最後まで入るのを躊躇していたけれど意を決して入った方は、「子どものときに魚とりをして以来、こんなに楽しいものだとは思わなかった」とキラキラした笑顔を向けてくださった。週末になると、自分でとった魚の様子を見に来る参加者の姿がみられる。

90cm 水槽の中を泳ぐ命の輝き

私たちの身の回りは面白いものであふれている。当館に来る子どもたちには、早い段階で気づいてその芽を大きくしていってほしいし、大人も早くはないけど、遅くもない。自分の身の回りにある面白いことに気づける人に、その手助けができる展示をつくっていきたい。

４．自然とつながる場所を目指して

企画展「おかやまアユモドキ水族館」開催中、来場された多くの方がつぶやいていたのが、「いつものサイピアじゃないみたい」という言葉だ。企画展示の担当者は、私と非常勤の統括責任者の二人。つまり、実働は一人。常時 40 種以上もの淡水魚の生体展示なんて、とてもではないが一人でできるものではない。職員の数も限られていて、ある時はプラネタリウムの解説員、ある時はミュージアムショップの店長、ある時は企画展担当者…と、すでになんでも屋と化しているため、入魂したくても企画展ばかりに注力できない。これまでの企画展は、自分でつくるか、外部から借りるか、外部主催で一切をお任せするかのどれかだった。そんな中、生体展示なんてなかなか手を出しづらいところだ。実現できたのは、岡山が淡水魚の宝庫であり、岡山淡水魚研究会があったからだ。外から見ているだけではわからないことも多い。実際に川に一緒に入ってみてわかることもある。それぞれの得意分野を活かして、任せるところと自分がするところの住み分けも大事だが、相手のやっていることをやってみて、思いつくこともある。外の視点からだと新しいアイデアも出る。いろいろな頭で考え、いろいろな手が合わされば、来場者の満足度につながる、それが実感できた企画展だった。

“サイピアが水族館になった２週間は夢のように楽しい時間だったね”ではなくて、ここで途切れないでほしい。２週間毎日魚を見に通ってくれた少年の熱が冷めないでほしい。一つのイベントをしてその日で終わりではなく、ずっと続いていくものであってほしい。それは毎年開催の恒例のイベントにする、という意味ではない。何もなければ、まさかサイピアにタナゴの種の名前がスラスラ言えて、カマツカとツチフキの区別がつく職員がいるとは思わないだろう。でも、水槽を置いていたら、“ここに来ればこの魚の名前を教えてもらえるかもしれない”と当館に淡水魚と一緒に足を運ぶ方が出てくるかもしれない。そうなれば、岡山淡水魚研究会につなげることもできる。

当館を説明するとき、「プラネタリウムのある科学館で…、公園に大きな恐竜の滑り台があって…、池田動物園来たことありますか？その隣の建物です。」とよく説明する。岡山市内唯一のプラネタリウムというのも、もちろん魅力の一つだが、岡山市に自然史博物館がないからこそ、自然科学に触れられる場所にしたい。それぞれの館にカラーがある。それが今回違った雰囲気にみせられたのは外部連携の力だ。地域にいる面白い人の力やものの面白さを掛け合わせて、当館ならではの形にし、来館者とつなげていきたい。それが十一年目からの目標だ。

謝辞

「早変わり」と題しましたが、実際は開催が決まってから半年間をかけて、コツコツと準備を積み重ね、協力してくれる方々の輪を広げていった企画展でした。外部団体の方とこれほどまでに時間をともにして作り上げたのは初めての経験でした。会場貸しではなく、一緒に作る楽しさを教えてくださった岡山淡水魚研究会の皆さまをはじめとした関係者の皆さまに、そしてこの発表の場をいただけたことに、心より感謝申し上げます。